

岡田宮

宝永4年(1707) 貝原益軒書

第 62 号

平成28年11月吉日

発行 岡田宮社務所

郵便番号 806-0063

北九州市八幡西区岡田町1番1号

電話 (093) 6 2 1-1 8 9 8

FAX (093) 6 2 1-5 3 3 0

ホームページ <http://www.okadagu.jp/>

Eメール okadajinja@jcom.home.ne.jp

氏神社と伊勢の神宮

私たちの祖先は、

暮らしの中で神さまをまつり、

その恵みに感謝してきました。

街や港を見下ろす高台や商店街、

農村地帯の一角などに、

鎮守の森があるのを各地で見かけます。

それらの多くは地元の氏神さまであり、

地域の守り神＝鎮守さまとして

大切に守られてきました。

そして全国に鎮まる神社の中で、

皇室の御祖神みおやがみをおまつりする伊勢の神宮は、

我が国の総氏神的な御存在として

時代を超えて人びとの崇敬を受けてきました。

神さまをうやまう心は、

伊勢の神宮をはじめ地域の神社を中心に、

親から子へ、子から孫へと、

伝え継がれる中で培われてきたのです。



目次

第二十二回 岡田神社書道展 …… 2

岡県紀行 2 …… 3

神社なぜなぜ問答 62 …… 3

年末年始の行事案内 …… 4

平成29年の厄年 …… 4

おかのあがたきこう
岡県紀行 2

幕臣岡田氏が寄進した石灯籠

岡田宮には様々な寄進物があるが、その一つに享保三年（一七一七）九月中旬奉納の石灯籠がある。

享保二年（一七一六）、八代将軍徳川吉宗の時代、「唐船」（蕃船）とも・中国船）が筑前国若松沖周辺の玄界灘に多数出没し、日本人との密貿易を頻繁に行つた。江戸幕府は目付の渡辺外記（永倫）、徒目付の岡田源七郎（正武）と高倉某の三名を「追逐上使」として九州に派遣し、福岡・小倉・長州三藩による「唐船」打払いを監察させた。上使の三名は「唐船」退散を岡田宮に祈願したところ、神威によってか「唐船」は退去した。岡田は石灯籠二基を寄進し、「階前」に建立されたという（岡田宮所蔵「岡田宮書上」・天明六年（一七八六）成立「遠賀郡熊手村書上帳」）。



現在、「享保三戌年」・「九月中浣」

「寄附岡田源七郎正武」と刻まれた石灯籠が拜殿の正面左右に一基ずつ立っている。拜殿の「階前」であり、建立当時の位置そのままかもしれない。左手のものには文字に墨が入れられているためはつきりと読める。右手のものは墨が入っていないが、全く同じ文言が刻まれている。左は礎石からの高さ約1.3m、右は一部補修されており、また礎石がないため高さは約1.2mである。

興味深いのは上使筆頭の渡辺ではなく、岡田が単独で寄進している点である。渡辺は知行一五〇〇石の旗本であり、岡田は役高一〇〇俵五人扶持であった。その岡田が単独で寄進したのは「岡田」という名に縁を感じたためであろうか。また幕臣参詣は他にも、宝暦十四年（一七六四）一月、日田代官揖斐十太夫（政俊）が岡田宮に参詣、白銀を奉納した事例がある。道中に立ち寄る程度の社参は他社にもあったと推測されるが、岡田宮のように幕臣が石灯籠を寄進していることは注目すべきであろう。

（北九州市立自然史・歴史博物館学芸員

守友 隆）

神社
なぜ
なぜ
問答

（その62）

三月三日の節供について
教えてください。

元来、節供とは皇室の年中行事である節日に、天皇に供された食事のことを意味し、後にはこの晴れの食事を供す日を節供と呼ぶようになりました。



我が国では、縁起のよい（陽数（奇数）の重なる）五節供が、特に重視されてきました。

その中でも三月三日の節供は、もともと三月上旬の巳の日におこなわれていたため、上巳の節供と呼ばれ、節供の起源である古代中国においては、この日に水辺で身を清める風習がありました。

我が国では、古くは宮中などで曲水の宴が催されてきました。この宴では酒盃を流水に浮かべて、盃が自分の前を通り過ぎるまでの間に詩歌を詠むなどの遊びがおこなわれましたが、これには流水による祓いの意味もあつたようです。

しかし近世以降、女兒の健やかな

成長を祝う行事へと変わっていきます。女兒がいる家庭では雛人形を飾るため、この節供は雛祭りと呼ばれるようになりました。

雛人形は、元来、身体についた穢や災厄を移して、河川や海に流す人の形をした形代（かたしろ）由来するといわれています。現在でもこの節供に、流し雛と呼ばれる形代により祓いをおこなっている地域があり、祓い行事としての意味合いが残っています。

雅やかな宮廷の様子を模倣した雛人形は、貴族の女兒が遊んだ人形に由来するともいわれ、お内裏様・お雛様と呼ばれる男女一対の雛は、天皇・皇后のお姿を模したものです。

現在の節供行事である雛祭りの人形には、庶民の皇室に対する敬慕の念と、娘の成長をお雛様のようにと願う親心が表されているといえます。

（一）陽数
一三四頁注（一）聖数参照

（二）五節供

人日（じんじつ）・旧暦正月七日、上巳（じょうし）・旧三月三日、端午（ぼんご）・旧五月五日、七夕（たなばた）・旧七月七日、重陽（ちゆうよう）・旧九月九日の日をいい、この日にはそれぞれの年中行事がおこなわれた。現在でも上巳の桃の節供と端午の節供（両者とも現在では新暦の式日）には子供の成長を祝う行事がおこなわれ、七夕には竹笹に願い事を書いた短冊をつるす七夕飾りがおこなわれている。

年末年始の行事案内

●大祓

十二月三十一日

大祓とは、半年間の罪穢を祓い、清々しい心となって各自の勤めに励み一家の幸福を増進せんとする意義深い行事です。

形式に住所、氏名、年令を書き身体をなで息を三度吹き掛け初穂料(お思召し)と共に袋に納めて十二月三十一日までに町内の神社総代か岡田宮社務所迄お届け下さい。

●どんど焼祭

一月十五日(日)

古くなったメ縄、門松等を焼納する神事。

地元の有志による餅つき、餅まき、黒崎祇園太鼓、神酒接待、ぜんざい等の諸行事が午前中に奉納されます。

●歳日祭

一月一日

新しい年をお祝いし、今年も良い年であるようにとお願いする神事。

午前〇時より、恒例の「福餅」を先着順で五百個配ります。

●開運福引き

一月一日〜三日

一枚五百円でハズレなし。一等は羽根ぶとんなどが当たります。新年の運だめしにどうぞ。



平成29年算賀の年祝

(年齢は数え年)

還暦	六十一才	昭和三十二年生
古稀	七十才	昭和二十三年生
喜寿	七十七才	昭和十六年生
傘寿	八十才	昭和十三年生
米寿	八十八才	昭和五年生
卒寿	九十才	昭和三年生
白寿	九十九才	大正八年生

平成29年の八方除

一白水星の方

生年	年齢(数え年)
昭和十一年	八十二歳
昭和二十年	七十三歳
昭和二十九年	六十四歳
昭和三十八年	五十五歳
昭和四十七年	四十六歳
昭和五十六年	三十七歳
平成二年	二十八歳
平成十一年	十九歳
平成二十年	十歳

平成二十九年の厄年

(年齢は数え年)

厄年(男)		
二十四才	前厄	平成六年生
二十五才	大厄	平成五年生
二十六才	後厄	平成四年生
四十一才	前厄	昭和五十二年生
四十二才	大厄	五十一年生
四十三才	後厄	五十年生
六十才	前厄	三十三年生
六十一才	大厄	三十二年生
六十二才	後厄	三十一年生
厄年(女)		
十八才	前厄	平成十二年生
十九才	大厄	十一年生
二十才	後厄	十年生
三十二才	前厄	昭和六十一年生
三十三才	大厄	六十年生
三十四才	後厄	五十九年生
三十六才	前厄	五十七年生
三十七才	大厄	五十六年生
三十八才	後厄	五十五年生

◆厄年大祭 二月節分日